

論文

あるCHARGE症候群児と養育者の共創コミュニケーションの様相 —ロマンティック・サイエンスを踏まえたエピソード記述から—

藤田 久美

FUJITA Kumi

永瀬 開

NAGASE Kai

近年、先天盲ろう児や重度・重複障害児とのコミュニケーションにおいて共創コミュニケーション・アプローチの重要性がしばしば指摘されている。本稿では、あるCHARGE症候群児と養育者におけるコミュニケーションのエピソードを記述し、共創コミュニケーションの概念を構成するコンタクト、叙述的コミュニケーション、コミュニケーションの多層性と情動の役割といった観点から解釈を行った。その際に、心理学におけるロマンティック・サイエンスの考えを踏まえながらエピソードの記述を行った。エピソードを検討した結果、医学的な検査結果にのみ基づいた限定的な働きかけではなく、実際のコミュニケーション場面における先天盲ろう児の様々なサインや身体的反応を基盤にした広がりのある働きかけが共創コミュニケーション・アプローチには重要であることが示唆された。

キーワード：共創コミュニケーション CHARGE症候群 二者間のインタラクション 三項関係におけるインタラクション ロマンティック・サイエンス

I. 問題と目的

先天盲ろう児や重度・重複障害児が他者と充実したコミュニケーションを行うことは、彼・彼女らのQuality of Life (QOL)を考える上で極めて重要である。また、養育者にとっても、障害のある自身の子どもと充実したコミュニケーションを行うことは大きなニーズである。こうした背景から、先天盲ろう児や重度・重複障害児におけるコミュニケーションの促進を目的とした実践研究が多く蓄積されている(中村・川住, 2007; 笹原・川住, 2007; 川住・南島・野崎, 2015)。そして近年、先天盲ろう児や重度・重複障害児とのコミュニケーション支援において共創コミュニケーション・アプローチの重要性がしばしば指摘されている(土谷, 2016)。共創コミュニケーションの概念について土谷(2011)は、「子どもの主体性、能動性を重んじ、子どもとのコンタクト(contact)と

子どものイニシアチブをもとに、相互性の高いインタラクションを子どもと共同して創りあげていく。そのプロセスにおいては子どもとイベントを共有しつつ、喜びという情動の高まりを乗り物にして、子どもの表出を活性化させる。表出の意味を共有しつつ対話の流れを創りあげていく」と述べている。共創コミュニケーションでは、その共創のプロセスにおいて、子どもと出来事を共有しつつ、喜びという情動の高まりを乗り物にして子どもの表出を活性化させ、表出の意味を共有しつつ対話の流れを作り上げ、自然言語への移行の兆しを捉えるとされている(土谷, 2011; 土谷, 2016)。

Rødbrøe and Janssen (2006)は、共創コミュニケーションを構成する概念について、次の3つをあげ、以下のような概説を行なっている(土谷, 2016)。まず1つめが、a)コンタクトである。コミュニケーションの発達はコミュニケーションを行う

者同士が喜びのある、躍動的な一体感を体験できるかどうかには依存している。上述したように、障害のある者が幸福感を持ち、質の高い生活を体験することは両親や支援者が到達しようとする目標である。障害のある者にとって、他者とコンタクトをもち、経験を共有することが幸福感を得る最も重要な要因であり、その時コミュニケーションをとる相手の幸福感は障害のある者の幸福感と緊密に結びついている。そのため、共創コミュニケーションでは、障害のある者とコミュニケーションを行う他者との間に何らかのコンタクトがあることが必要である。

次に2つめが、b) 叙述的コミュニケーションの重視である。コミュニケーションには、指令的(Imperative)な機能と叙述的(Declarative)な機能があるとされる。指令的な機能とは、対象に到達したり目的を達成したりするための大人からの(または大人への)指示として定義される。一方、叙述的な機能とは、外界の対象物や出来事に子どもの(または大人の)注意を向けさせようとする前言語的な試みとして定義される。すなわち、叙述的コミュニケーションとは、他者と考えや思いを共有する目的で行われるコミュニケーションである(土谷, 2016; 永瀬・大石・藤田, 2017)。この叙述的コミュニケーションの中では、コミュニケーションパートナーが、障害のある者が向ける注意や表出に対して反応、省察することが必要不可欠である。

最後に3つめが、c) コミュニケーションの多層性と情動の役割である。コミュニケーションの発達には多くの層として捉えられるとRødbye and Janssen (2006)は述べている。すなわち、コミュニケーションの異なった層が複雑に多層化していくことがコミュニケーションの発達であると捉えられる。コミュニケーションの層を積み重ねるためには、より複雑な要素が加わったインタラクションの流れを壊すことなく、コミュニケーションを行う者同士が能動的な中で相互性を保つことが必要である。このコミュニケーションにおける多層性について、土谷(2016)は以下の7つの層を

指摘している。

最初の層は、近接した関係のもとでのコンタクトである。触・振動系によるコンタクトが生じる中で経験と情動を共有することによって障害のある子どもには基本的な安心が生まれるとされる。そこでは、相互に注意を向けあい、近接する関係を調整し合うなかで、調和のとれたインタラクションが生じる。

次の層は、二者間のインタラクション(Dyadic Interactions)である。このインタラクションを成り立たせているのは第一次間主観性(Trevarthen, 1979)である。間主観性とは、子どもと親が情動交流を基盤にして意図理解をし、相互にわかりあえる関係であり(Trevarthen, 1979)、「あなた」の主観のある状態が「あなた」と「私」の「あいだ」を通して「私」の主観のなかに入ってくることで理解される(鯨岡, 2006)。「乳児-物」「乳児-人」という二項関係の時期の間主観性を第一次間主観性という(Trevarthen, 1979; 大藪, 2014)。このインタラクションにおいて、調律と共同調整、相互性、ターンテイキングが生じ、そのプロセスにおいて相互に向け合う注意と近接した関係がみられる。

三つめの層は、係わり合う二者間に外界の事物や事象を取り込んだ三項関係におけるインタラクション(Triadic Interactions)が位置づけられる。このインタラクションは第二次間主観性の現れであり、活動において二者間に事物が共有されて用いられるようになることが端緒となる。第二次間主観性とは、相手の意図を共有しながら、人との関わりと物との関わりを統合させ、物を人とのコミュニケーションの中に取りこんで行う間主観性である(Trevarthen, 1979; 大藪, 2014)。そこでは、共同注意の発生、心的イメージとカテゴリーの形成、情動の身体痕跡の出現、表象的な意味の成立と表出、及び意味の共有へのステップを踏む。そして、そのプロセスにおいて情動的な没入と情動の調整が進展していくとされる。

四つめの層は、意味共有である。ここでは外界がどのように意味づけられるかということが問題となる。身振り表現は経験からどのように創出さ

れるのかということや、事象に関連したイメージはどのようにして身体痕跡となるのかということが問題とされる。

五つめの層は、ナラティブである。ナラティブとは、経験的に組織化する行為や経験や人生を編集する行為を指している(やまだ, 2006)。障害のある者とのコミュニケーションにとって、コミュニケーションパートナーとともに経験したことから物語を共同で構成していく上で、ナラティブは重要となる。このナラティブを構成することが対話へとつながる。

六つめと七つめの層は、それぞれ、社会的な意味の成立と文化的社会的言語、あるいは自然言語への移行である。六つめの層では、文化的な手話とともにいくつかの自然言語が扱われる。障害のある者が表出したことの意味が係わり合う二者によって共有されていくプロセスをネゴシエーションと呼ぶ。七つめの層では、コミュニケーションパートナーが障害のある者の思考内容をどのようにして捉えるかなどが課題となる。

ここまで共創コミュニケーションを構成する概念についてまとめた。上述したように共創コミュニケーションの概念に関しては精緻な理論化がなされている。こうした中で、共創コミュニケーションの具体的な様相を捉えるための具体的な事例報告も蓄積され始めている(土谷・菅井・中村・岡澤・笹原, 2016)。土谷ら(2016)では、先天盲ろう児の共創コミュニケーションの事例が複数報告されている。これらの事例報告では、先天盲ろう児の共創コミュニケーションのあり様が生き生きと描かれており、先天盲ろう児の共創コミュニケーションの具体的な様相を知ることができる。しかしながら、先天盲ろう児や重度・重複障害児の共創コミュニケーションの様相を報告した事例報告は極めて数が少ない。また、数少ない土谷ら(2016)の事例報告においても具体的なコミュニケーション行動の記述は行われているものの、その際の子どもやコミュニケーションパートナーの心的状態を推測するような記述は十分になされていない。共創コミュニケーションが、コミュニケーションを行

う二者間での情動や心的イメージ、意味の共有といった点を重視するものである以上、先天盲ろう児とコミュニケーションを行う相手との間でどのような情動や意味が共有されているのかという心的状態を解釈することは欠かせないと考えられる。

子どもやコミュニケーションパートナーの心的状態を解釈する上で参考になるのが心理学におけるロマンティック・サイエンスである。ロマンティック・サイエンスとは、法則定立的(nomothetic)な心理学と個性記述的(idiographic)心理学を結びつけ、生き生きとした全体を追求する科学の在り方である(Luria, 1979; 松尾, 2015)。Luria (1979)が、著書の中で、「科学におけるロマン主義は、生きている現実をその要素成分に分割することを望まず、その人生の具体的な出来事の豊かさを抽象的なモデルで表現して、その現象そのものの特性を失うことも望まない。」と述べているように、ロマンティック・サイエンスにおいては、一般的な法則を提示することや、法則を尺度化することによる測定的な方法は採用されず、人生の具体的な出来事の豊かさや、現象・そのものの特性を失わない心理学が目指され、その方法としての観察が重視される(松尾, 2015)。そして、そこで行われる観察は、個別の事実を単に純粋に記述することではなく、1つの出来事をできるだけ多くの観点から捉えて記述することである。このような観察によって、事物や出来事が他の事物や出来事にどのように関わっているのかを見つけ出し、理解することが可能になる(松尾, 2015)。心理学におけるロマンティック・サイエンスを踏まえると、先天盲ろう児や重度・重複障害児の共創コミュニケーションの様相をより精緻に描くためには、彼・彼女らとコミュニケーションパートナーとの係わり合いや、その際にコミュニケーションを行う二者の心的状態を複数の観点から捉えて記述することが重要である。

以上の点を踏まえ、本稿では、筆者らが継続的に係わりを持っているCHARGE症候群児における養育者とのコミュニケーションの様相について、共創コミュニケーションという視点からいくつか

のエピソードを報告する。その際、心理学におけるロマンティック・サイエンスを踏まえ対象児と養育者のコミュニケーション場面を観察、記述しながら、共創コミュニケーションの概念を構成するコンタクト、叙述的コミュニケーション、コミュニケーションの多層性と情動の役割といった観点から捉えていくこととする。これによって、対象児の共創コミュニケーションのあり様を描き出すことができると考えられる。上述したように、先天盲ろう児や重度・重複障害児のコミュニケーションについて共創コミュニケーションという視点から取り上げた研究は未だに少ない。また、CHARGE症候群の事例について検討した医学的な研究はいくつか見られるが、発達心理学領域や特別支援教育領域に関する事例報告はほとんどなされていない。そのため、本稿で取り上げる事例は学術的に極めて意義があると考えられる。加えて、対象児の主体性や能動性、ポジティブな情動を喚起するために必要なコミュニケーションパートナーの係わりについても報告するため、CHARGE症候群児のコミュニケーション支援に関する臨床的な示唆を得ることにもつながると考えられる。

II. 方法

1. 対象児

対象となるAさん(以下、Aとする)は、かかわり開始当初2歳0ヶ月の女子であった。かかわり開始後12ヶ月後に地域の保育園に通園するようになった。保育園への通園頻度は週3日で、園での1日あたりの活動は5時間程度である。

2. 生育歴

Aは出生後5ヶ月時点でCHARGE症候群の診断を受けた。CHARGE症候群とは、Coloboma(眼の欠損)、Heart defects(心奇形)、Atresia of choanae(後鼻孔閉鎖)、Retarded growth and development(発達の遅れまたは中枢神経奇形)、Genital abnormalities(生殖器低形成または尿路奇形)、and Ear anomalies(耳の奇形または難聴)

の頭文字より名付けられる症候群であり、上述した6症状のうち、目の欠損または後鼻孔閉鎖を含む4症状以上を認めることが診断基準とされている(Pagon, Graham, Zanola, & Young, 1981; 佐久間・荒井・高橋・松田・小河原・折館, 2013)。Aの視力については、眼科医による視力測定においては、現在のところ、視力は測定不能と判断されている。右眼は網膜の欠損が認められ、光の判別がつく程度であると考えられている。左眼は、視力はあるとされているが、下の位置が見えにくいだろうと推測されている。視界が狭いため、物を見る時は、身体全体を動かして見る。Aの聴覚については、聴性脳幹反応検査(ABR)で、2歳0ヶ月時点では反応がなかったが、3歳1ヶ月の検査では110dB反応が認められたが、三半規管の形成不全があり、重度難聴の診断がされている。日常生活では人の話し声や様々な音に対して反応する様子が見られるため、医学的診断以上の聴力があると推測される。心疾患については左心室の疾患があるため、成長過程で手術を行う予定である。また、肺動脈の疾患もあり、生後5日後に手術を行っている。経管栄養は生後すぐに開始し、現在は経鼻経管栄養を行っている。気管切開は生後約3か月(112日目)で行われ、現在も継続中である。

Aの全般的な発達について、遠城寺式乳幼児分析的発達検査を実施したところ、移動・運動が1歳0ヶ月、手の運動が1歳5ヶ月、基本的習慣が1歳5ヶ月、対人関係が1歳5ヶ月、言語理解が1歳7ヶ月であった。発語については気管切開しているため算出できなかった。

3. エピソードの収集手続きとエピソード記述の方針

本稿で取り上げたエピソードは、筆者が参与観察したAと養育者の関わりを「エピソード記述」(鯨岡, 2005)を援用して記述したものである。エピソードとして取り上げた基準は、Aと養育者の間で共創コミュニケーションが成立したものとした。本編で取り上げたエピソードの総数は8編であり、そのうち、二者関係による共創コミュニ

ケーションのエピソード記述を「Aと養育者との間に見られる二者間のインタラクション」、三項関係による共創コミュニケーションのエピソード記述を「Aと養育者とモノの間に見られる三項関係としての社会的インタラクション」とした。この2つの基準で分類した理由としては、コミュニケーションにおける層の代表的なものであり(中村ら, 2016)、現在のAのコミュニケーションの中心となっている層であるためである。前者のエピソード数は3編、後者のエピソード数は5編であった。これらのエピソード記述では、単にAと養育者のインタラクションを記述するのみではなく、共創コミュニケーションを支える両親の意図及び感情、そして、Aにどのような感情の揺れ動きが生じているのかといった点について、参与観察者である筆者が意味付けしながら記述した。加えて、二者間のインタラクションを特徴づける調律と共同調整、相互性、ターンテイキングや、三項関係としての社会的インタラクションを特徴づける共同注意、心的イメージの構築と概念形成、情動の身体痕跡、心的意味、表出と共有された意味、感情豊かに係わることと情動の調整といった観点からも記述した。

Ⅲ. Aと養育者との間に見られる二者間のインタラクションに関するエピソード

まず、Aと養育者との間に見られた二者間のインタラクションについて三つのエピソードを記述し、そのエピソードを共創コミュニケーションの観点から解釈していく。

Ep 1: 父がAにふれて名前を呼ぶ

父が「Aちゃん」と名前を呼んで、Aの頬に手をあてる。Aは顔を父の方へ向け、じーと父の方を見る。父が「Aちゃん」ともう一度名前を呼ぶと、Aの口が少しだけ動く。Aの声は聞こえないが、「お父さん」と言いたいような表情にみえる。

このEp 1では、父親がコミュニケーションの

始発者となってAの頬に手を当てるという近接したコンタクトを行ったところから父親とAとのインタラクションが始まっている。このコンタクトはAにとってポジティブな情動を伴ったものとして受け取られたと考えられ、顔を向けるという応答を返し、父親もその応答を受け取ったことから「Aちゃん」と名前を呼んでいる。このようなインタラクションは、父親がAの行動からサインを読み取りながらペースを作り、修正を加えながら子どもの注意や関与が展開していく方向で接近し、励ますという父親の調律のもとに支えられている。Aは父親の頬に触れるという発信に対して注意を向けている様子がうかがわれることから、相互性のあるインタラクションへの準備が整っているといえる。

参与観察後に父親にこのエピソードのことを尋ねると、父親からは、このようなインタラクションが日常生活の中でいつもくりひろげられているということが語られた。Aにとって父親は安心できる存在であり、自分のことばを代弁してくれる存在であり、遊びを拡げてくれる存在である。Aにとって頬に触れる等の近接した関係のもとでのコンタクトは信頼ある相手であれば心地よいものであることがうかがわれるが、この心地よさは、Aと父親の近接した関係のもとでのコンタクトの積み重ねによって構築されていると考えられる。

Ep 2: ハンモックで母の膝に

Aのために買ってもらったハンモックに母親の膝に座って揺らしてもらおうA。「ゆらゆらー」「気持ちいいねー」と母は優しい声で声をかける。母親の身体にすっぽりはまっているA。母とのコンタクトによってAの表情は柔らかくなり、笑みがこぼれる。

このEp 2では、母親の膝に座るというコンタクトがAのポジティブな情動を喚起したことがうかがわれる。全身で母親のぬくもりを感じながら、母親と共にゆったりとした揺れを感じている様子が見てとれる。母親の声かけがAの表情を豊かに

し、ゆったりとした揺れがAに心地よさを与えているように見える。この母親が行った「ゆらゆらー」「気持ちいいねー」といった声かけは叙述的コミュニケーションの一つだと考えられる。中村ら(2016)は叙述的コミュニケーションについて、コミュニケーションを行う二者間の興味に作用するという特徴を指摘している。そのため、このEp 2は、信頼関係のある母親との近接したコンタクトと叙述的コミュニケーションがAにポジティブな情動を喚起したものだとして解釈することができる。

Ep 3: いないいないばあで笑顔

顔を両手で隠すA。「あれあれあれ？ Aがいないよー。いないいないいないいないいない。」と父が声かける。Aは父の言葉に合わせてるように顔を隠し続ける。父が「いないいないよ。」と、もう一度言うのと両手を顔の横に広げて目をパッチリと開けて父を見る。その動作に合わせて父は「ばー」と言う。父もAも笑顔になる。

このEp 3では、Aが発発者となってインタラクシオンが開始されている。Aの顔を両手で隠す仕草を父親が「いないいないばあ遊び」と解釈することによって、ターンテイキングを繰り返すインタラクシオンが展開されている。このインタラクシオンの展開をみると、Aと父親がそれぞれの行動を「いないいないばあ遊び」の文脈で捉えることによって、発信者と応答者の順番をリズムよく交替しながらインタラクシオンを行なっていることがうかがわれる。具体的には、父親がAの行動を「いないいないばあ遊び」解釈することによって自身の行動を調整しているだけでなく、父親の発話をAが「いないいないばあ遊び」と解釈することによって、自身の顔を隠し続ける調整を行なっていることも読み取れる。このことから、共創コミュニケーションにおける共同調整は、養育者の調律のみで成立するものではなく、子ども側がコミュニケーションパートナーの発信に応じて自身の行動を調整することがあってはじめて成立

するものだということがいえる。

このAと両親との「いないいないばあ遊び」について参与観察後に父親に尋ねると、はじめは、親が動作をみせて教えるという親からの発信をAが受信するという一方向的なインタラクシオンだったということが語られた。しかしながら、次第にAの仕草に合わせて両親が「いないいないばあ」などの声かけをしていくことを繰り返すと、Aはその声に合わせて自分の行動を調整するようになり、最近では、Aの方から両親にアピールすることもあるということであった。「いないいないばあ遊び」のインタラクシオンにおいて、Aは父親とのやりとりによくわくわくしている姿を見せ、Aに注意を向ける父親も幸せに満ち溢れた表情を返す。このようなポジティブな情動の共有も共創コミュニケーションにおける共同調整の基盤となっていると考えられる。

IV. Aと養育者と絵本の三項関係としての社会的インタラクシオン

次に、Aと養育者と絵本の三項関係による社会的インタラクシオンについての五つのエピソードを記述し、共創コミュニケーションの視点から解釈していく。

Ep 4: 絵本とって

リビングの片隅に母親の手作りの本棚がある。この本棚は、Aの目線に合わせた高さになっており、Aのお気に入り絵本が並べてある。この本棚から少し離れたところに座っているAが、絵本の方に手を伸ばし、指さしをする。母親は「とってほしいの？」と声をかける。Aは母親の方を見る。母は、「これかな？」と言って絵本をとってAに渡すと、その絵本をじっとみるA。

このEp 4では、Aの指さし行動から絵本を介した社会的インタラクシオンが展開されている。Aの指さし行動を「絵本をとってほしい」という要求だと解釈した母親は「とってほしいの」という言語的な応答を返す。その後、Aは母親の方

を注視し、母親はその注視行動を踏まえた上で自身の解釈が妥当なものだと確信を持ったと考えられる。そして、母親が絵本をとってAに渡すことで継続的なインタラクションが展開されていく。このEp 4では、AとのインタラクションにおいてAの指さし行動が共同注意の重要なサインとなっていることが見てとれる。Bates, Camaioni, & Volterra (1975)は、乳児の指さしについて「原命令の指さし」と「原叙述の指さし」に分類している。「原命令の指さし」は子どもが自分の欲求を満たすために大人を利用する指さしであり、「原叙述の指さし」は乳児の関心へ大人の注意を向けさせようとする指さしである。このEp 4で見られたAの指さし行動は「原命令の指さし」であると考えられるが、このような指さし行動はAと母親が絵本に対して共同注意を向けていることを示している。子どもにとって、コミュニケーションパートナーと共同注意を向けるという経験は、「理解のあるパートナー」を知るという経験である(中村ら, 2016)。この経験がコミュニケーションをする相手への意識を育て、さらなるコミュニケーションを生み出すことへとつながると考えられる(中村ら, 2016)。

Aがいつも過ごすリビングでは、両親と絵本を介したやりとりが展開されている。Aが自ら絵本を取りに行くこともあるが、両親に指さしをして「絵本をとって」と要求することも度々あるということが両親から語られている。こうしたやりとりは日常的に行われている。Aは、両親の反応を確かめるようなまなざしを向け、両親は応答的にAに係っている。こうした両親との絵本を介したインタラクションは、A自身の欲求が満たされることに加え、自身の欲求が両親に伝わっているということも相まってポジティブな情動をAに経験させていると考えられる。

Ep 5: 手話で「読んで」を教える母

Aが指さした絵本をとった母親は、「読んで?」といいながら手話で「読んで」と表現する。Aは手話をする母親をよく見ている。

このEp 5でも、Aが発発者となって絵本を介した社会的インタラクションが展開されている。指さしによるAからのサインをAの母親は「読んでほしい」と解釈し、「読んで」という音声言語での表現と手話による表現で応答している。このエピソードについて、参与観察後に母親に尋ねると、生活の中で、Aが理解できるだろうと判断したことばを「手話」で教えているとのことであった。Aの中で、どの程度「読むこと」や「絵本」に関する心的イメージや概念が形作られているかは不明であるが、手話をする母親に向けられたAの眼差しと表情からは、母から発信される手話の意味をAのすべての感覚で受け止めているようにみえる。この絵本への指さし、母親の「読んで」という手話と音声言語での表現、そして手にとった絵本の触覚が一つの関係としてAの中で意味づけられることによって、意味共有の層が発芽していくと考えられる。

Ep 6: 絵本でのふれあい

親子が頬に触ったり、ぎゅーっとだきあったりする内容が描かれている絵本一緒に見ているAと母親。母親は、絵本を読みながら、それぞれのシーンでAと触れ合う。「ほっぺはふっくら、ぼちゃぼちゃぼちゃ」というセリフとともに親が子の頬に触れるシーンで、Aの頬をさわる母親。その後、Aも自分の手で自分の頬を触る。そして「ぎゅー」というセリフとともに親子が抱き合うシーンで、母親がAの顔をみて「ぎゅー」と言うと、Aは何かを期待するようなまなざしを母親に向ける。母親がAを抱きしめると、うれしそうな顔になる。

このEp 6では、同じ絵本に共同注意を向けているところから展開されている。母親が絵本のセリフを音読するといった音声による発信と、母親が頬に触れたり、抱きしめたりするといった身体接触を伴うコンタクトによる発信をAがポジティブな情動を持って受けとめていることが、このEp 6から見てとれる。実際に、親子が抱き合うシー

ンでは、母の声かけにAのわくわくした気持ちが伝わってくる表情であった。また、「ぎゅー」と母が抱きしめる場面でのAは幸せに満ち溢れる表情である。母親もまた、Aに負けなくらいの幸せ溢れる表情をAに見せていた。また、このEp 6では絵本を介した身体接触はAの身体と心に情動の身体痕跡(Body emotional traces)を残していることもうかがわれた。具体的には、Aの頬に母親が触れた後に、Aが自分の手で自分の頬に触れたところである。子どもは、ポジティブな情動が共有されるような社会的やりとり遊びの直後に、身体的シグナルあるいは同じ経験を振り返るための身振りを出ることがある(中村ら, 2016)。盲ろう児においては、このような身体的反応や表出が共有された経験の最も際立った音や動き、サインの情動の身体痕跡とみなされる(中村ら, 2016)。このEp 6でAが示した自分の頬に触れるという身振りは、母親との近接したコンタクトを基盤としたインタラクションにおける経験が情動の身体痕跡として構築されたことを示している。この身体的反応や表出をパートナーが読み取り、このような経験を蓄積していくことで意味共有の層へと繋がっていくことが指摘されている(中村ら, 2016)。そして、このEp 6では、Aが母親に対して抱きしめてもらうことを期待するような眼差しを向ける様子も見られている。期待反応は受動的なコミュニケーションから能動的なコミュニケーションへの移行に伴う重要な変化であるということが指摘されている(北島・小池・堅田・松野, 1993)。このことから、Aはポジティブな情動を伴う母親とのコンタクトを重ねることで、他者との自発的なコミュニケーションを動機づけられていることも考えられる。

Ep 7: 絵本のお気に入りの場面で

リビングでの絵本の読みきかせはAの毎日の日課となっている。Aに対して読み聞かせをはじめた母親。Aは絵本をじーっと見つめながら、母親の声に耳を傾けている様子である。Aのお気に入りのページがでた瞬間に、Aはそのペー

ジの絵を指さす。それに応答して、母は「○○あったねー」と声をかける。Aは目を見開き、絵をじっとみる。その後、納得したように自分でページをめくる。

このEp 7も、Aと母親が同じ絵本に共同注意を向けているところからインタラクションが展開されているエピソードである。Aはお気に入りのページになったタイミングで指さし行動を行うが、その行動に対して母親が「○○あったねー」という叙述的なコミュニケーションを行なっている。この母親からの叙述的なコミュニケーションを受けてAはさらにお気に入りのページに対する興味を強めている。そのため、このEp 7でも母親の「○○あったねー」という発言がAの絵本に対する興味をより強めたものと考えられる。また、このお気に入りのページを指さし、それに注意を向けるという身体的反応や表出も、絵本を介した叙述的コミュニケーションによるインタラクションが身体痕跡として残されていることを表していると考えられる。

Aは日常的にいくつものお気に入りの絵本を母親に読み聞かせてもらっている。参与観察後、この場面について母親に尋ねると、Aは一つ一つのシーンを憶えているのか、好きな場面のページが近づいてくるとわくわくした表情を浮かべているということが母親から語られた。母親もAの好きな場面をよく知っていて、両者しかかわらない心地よいやりとりが展開されているように見える。

Ep 8: 絵本を介して

母親がAといっしょに絵本を見ている。ページ通りに進むのではなく、Aがめくるペースに合わせて母親が読んでいく。Aが絵本をばたんと閉じると、母親が「おしまい?」と言いながら手話をみせる。Aは次をとってといわんばかりの表情を母親に浮かべ、絵本棚を指さす。

このEp 8も、Aと母親が同じ絵本に共同注意を向けているところからインタラクションが展開さ

れているエピソードである。絵本の読み聞かせは、Aのページをめくるペースに合わせて行われており、母親による共同調整が行われていることが読み取れる。共同調整とは、障害のある子どもの感情やニーズに気づき、即時的で効果的に応答する連続的で相互的な順応の過程だとされる(中村ら, 2016)。Aの絵本をめくるタイミングやペースから、母親はAの絵本に対して向ける興味や感情を読み取り、それに合わせた読み聞かせを行っていることがわかる。また、Aが絵本を閉じるタイミングで母親が「おしまい?」という音声による発信と手話による発信を行うと、Aは次の絵本を要求する指さし行動による応答を行なっている様子も見られる。このことは、母親が行なった「おしまい?」という音声と手話による表出が社会的な意味を持ったサインとして、Aに受けとめられていることを示唆するものである。このEp 8のように、Aがとつぜん「ボタン」と絵本をとってしまうことは日常的に頻繁にあるということが母親から語られたが、「おしまい」ということばにAが理解している手話の表現をのせたことで、「この絵本はおしまい」ということを共有しあっていることがうかがわれる。Ep 5と同様に、絵本を閉じること、母親の「おしまい」という手話と音声言語での表現が一つの関係としてAの中で意味づけられることによって、意味共有の層が発芽していくと考えられる。そして、この一連のインタラクションの基盤には、同じ絵本を読むことに対するポジティブな情動を共有していることが考えられる。日常的に行われる絵本を介しての母親とAのインタラクションはAのペースにあわせながら行われている。

V. まとめと今後の課題

ここまでAと養育者の共創コミュニケーションについて、二者間のインタラクションと三項関係におけるインタラクションの2つから、心理学におけるロマンティックサイエンスを踏まえエピソードを記述した。これらのエピソードから、共創コミュニケーションの展開においては、両親が

Aの表出する発信行動を丁寧に受けとめ、自身の行動を調整した上で応答するのみならず、A自身も限られた感覚の全てを使って両親の発信行動を受けとめ、それに応じた応答行動を返しているということがうかがわれた。これまで、子どもの自発性やポジティブな情動を喚起するためには応答的環境を設定することが重要であることが指摘されてきたが(上野, 2016)、本稿で取り上げたAのエピソードは、その応答的環境を子ども自身がどのように受けとめているかという点に注目することの重要性を示唆している。先天盲ろう児とのコミュニケーションにおいては、その視覚と聴覚の障害を過大に評価し、コミュニケーションパートナーの方が働きかけを限定的なものにしてしまうことが考えられる。実際に、Aの視力検査や聴力検査は遠感覚系に大きな障害があることを示している。しかしながら、本稿で取り上げたエピソードは、Aが触・振動系といった近感覚のみならず、障害されている遠感覚も使って両親からの働きかけを受けとめ、情動の身体痕跡として構築されていると考えられる身体的反応や表出をはじめとする様々な応答行動を返していることを示唆している。こうしたことから、医学的な検査結果にのみ依存した限定的な働きかけを行うのではなく、実際のコミュニケーション場面における先天盲ろう児の様々なサインや身体的反応を基盤にした広がりのある働きかけが共創コミュニケーション・アプローチには重要であると考えられる。

今後の課題として、三項関係におけるコミュニケーションの層から意味共有の層やナラティブの層、社会的な意味の成立と文化的社会的言語の層への発芽がどのようになされていくのかを検討していくことが必要である。本稿で取り上げたエピソードでは、二者間のインタラクションと三項関係におけるインタラクションの2つの層に焦点をあてて検討を行った。その中で、上述した層への発芽につながると考えられるエピソードもいくつか取り上げた。今後、Aと養育者の共創コミュニケーションを継続的に観察していくことで意味共有の層やナラティブの層、社会的な意味の成立と

文化的社会的言語の層への発芽を捉えることが課題となるだろう。

また、共創コミュニケーションにおけるコミュニケーションパートナーの調律や共同調整がどのような心的過程のもとに行われているのかをより詳細に検討していくことも今後の課題である。本研究では、調律や共同調整が行われている場面を記述し、その様相を捉えることに焦点を当てていたため、その調律や共同調整がどのような心的過程のもとで行われていたのかについては、筆者らの推測が中心であった。この点について、養育者に対するインタビュー等によってより詳細に検討していくことが必要となるだろう。

付記

研究の実施と発表に関しては、本研究の対象児の保護者の了解を得ております。Aちゃんのご両親のご協力に感謝申し上げます。

引用文献

- Bates, E., Camaioni, L., & Volterra, V. (1975). The acquisition of performatives prior to speech. *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development*, 21(3), 205-226.
- 川住隆一・南島 開・野崎義和. (2015). 重度・重複障害児のコミュニケーション行動の形成に関する研究：言語的働きかけに対する応答行動の発現経過. *東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報*, 15, 43-52.
- 北島善夫・小池敏英・堅田明義・松野 豊. (1993). 重症心身障害者における期待反応の特徴. *特殊教育学研究*, 30(4), 43-53.
- 鯨岡 峻. (2006). ひとがひとをわかるということ：間主観性と相互主体性. 東京：ミネルヴァ書房
- Luria, A.R. (1979). Cole, M., & Cole, S. (Eds.) *The Making of Mind: A Personal Account of Soviet Psychology*. Cambridge: Harvard university press.
- 松尾奈美. (2015). A.R.ルリアのロマンティックサイエンスの構造と意義. *広島大学大学院教育*

- 学研究科紀要 第三部, 64, 75-83.
- 永瀬 開・大石由起子・藤田久美. (2017). 重症心身障害児・者における探索行動に関する研究動向：探索行動を促す係わりに焦点を当てて. *山口県立大学学術情報*, 10, 11-19.
- 中村保和・岡澤慎一・土谷良巳. (2016). 共創コミュニケーションのパラダイム：体系と概念. *先天盲ろうの子どもとの共創コミュニケーション：理論と実際*, 東京：盲ろう教育ネットワーク21, 13-34.
- 中村保和・川住隆一. (2007). 弱視ろう児に対するコミュニケーション支援—大学における教育相談でのかかわりを通して. *東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報*, 7, 59-68.
- 大藪 泰. (2014). 乳児の共同注意の研究パラダイム：人間の心の基本形を探る. *早稲田大学大学院文学研究科紀要*. 第1分冊, 哲学 東洋哲学心理学 社会学 教育学, 59, 5-20.
- Pagon, R.A., Graham, J.M. Jr., Zonana, J., & Yong, S.L. (1981). Coloboma, congenital heart disease, and choanal atresia with multiple anomalies: CHARGE association. *The Journal of Pediatrics*, 99(2), 223-227. doi: 10.1016/s0022-3476(81)80454-4.
- Rødbroe, L., & Janssen, M. (2006). Communication and congenital deafblindness: Congenital deaf blindness and the core principles of intervention. *VCDBF/Viataal*, St. Michielsgestel.
- 佐久間直子・荒井康裕・高橋優宏・松山秀樹・小河原昇・折館伸彦. (2013). CHARGE syndromeの7例の診断と聴覚の検討. *Otology Japan*, 23(1), 25-30. <https://doi.org/10.11289/otoljpn.23.25>
- 笹原未来・川住隆一. (2007). 医療的ケアを要し自発的運動が困難な重度・重複障害者へのコミュニケーション支援. *東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報*, 8, 47-57.
- 土谷良巳. (2011). 欧州における先天性盲ろうの

子どもとの共創コミュニケーションアプローチ. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 17, 1-11.

土谷良巳. (2016). 障害の重い子どもとの共同活動における共同性と相互性：行動体制間(相互)調整の観点からの考察. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 22, 9-18.

土谷良巳・菅井裕行・中村保和・岡澤慎一・笹原未来. (2016). 先天盲ろう児との共創コミュニケーションの実際. 先天盲ろうの子どもとの共創コミュニケーション：理論と実際, 東京：盲ろう教育ネットワーク21, 35-34.

上野将玄. (2016). 応答的環境. 谷田貝公昭編著. 保育用語辞典, 41.

やまだようこ. (2006). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念：ナラティブ・ターンと物語的自己. 心理学評論, 49, 436-463.

**Co-creating communication between a child with CHARGE syndrome and parents:
From the perspective of romantic science**

**FUJITA Kumi
NAGASE Kai**

In recent years, the importance of the co-creative communication approach has often been highlighted when examining communication in children with congenital deaf-blindness and children with severe and multiple disabilities. This paper describes some episodes of dyadic interactions and triadic interactions in a child with CHARGE syndrome and parents based on romantic science, and interprets it from the perspective of co-creative communication. It was suggested that an approach based on various signs and physical reactions of children with congenital deaf-blindness in actual communication situations is important for the co-creation communication approach.

Co-creating communication, CHARGE syndrome, Dyadic interactions, Triadic interactions, Romantic science